法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

民俗学と人文地理学の狭間に立って : 沖縄 研究に想う

小川, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
148
(終了ページ / End Page)
162
(発行年 / Year)
1979-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013093

民俗学と人文地理学の狭間に立って

――沖縄研究に想ら――

小川

徹

方のほとんどはご存知ないであろうが、昭和十年に刊行された『日本民俗学研究』には、佐々木彦一 郎の論文「人文地理学と民俗学の境」が載せられている。 日の演題を構想するに当って、演者である私は、そぞろ四十余年の昔を想起していた。 会場の方

輝く傑作であり、 表する伊波普猷の名も見えた。 柳田自身の他、 説明しておく。 これは沖 『日本民俗学研究』 については、専門の方ならば周知のことと思うが、一般の来聴者のためにひと言 縄 稲作農耕儀礼の体系的な分析であり、 昭和九年の夏、 折口信夫・金田一京助など当代の学者が顔を揃えたが、 当時、 これに比肩されるべき業績は本土ではまだ生まれていなかったことを付言し 伊波の演題は 柳田国男の還暦を記念する講演会が開催された。講演者の顔ぶれには、 「南島稲作行事採集談」。談とあるが、内容からすれば、 彼の学問的業績のなかでも一きわ鮮やかな子ノ星と そのなかに混って、 沖縄を代

ておきたい。以上の方々の他は、一応、 柳田の弟子に当るまだ若い研究者たちで、その桜田勝徳・関

敬吾・大間知篤三・橋浦秦雄・最上孝敬などに混って、佐々木彦一郎が登場するのである。 H における学問としての民俗学は、 まさにこの時誕生したのであり、『日本民俗学研究』 の刊行

る佐 私は日常その言動に接し、 はながく記念されるに価しよう。 々木は何を語ったであろうか。 ながら付け加えておくと、当時佐々木は、私が学生として在籍する地理学教室の助手であり、 指導を受ける立場にあった。佐々木はその後間もなく翌々十一年四月、三 では、 この記念すべき時に当って、筆者である私と立場を同じうす

十五歳で夭折するのである。今日から思えば、年齢的にも大きく距ってはいなかったわけであるが、 東大の助手といえば社会的地位も現代とは格段に高いものと考えられ、私らにとっても大先輩

象がなぜ取り上げられねばならないのか。このような重要な課題について、佐々木はほとんど言及し 学と民俗学の両面にわたる性質の事象を数えあげ、これに関連した内外の業績を述べている。しかし、 響があとあとまで残った。したがって、聴衆のなかで佐々木の演題にもっとも期待したのは他ならぬ 私であったろうといえる。 とみえた。事実、私などの民俗学的採集(これを当時は採訪といっていた)には、 いったいなぜそれらの事象について両者が関連するのか、あるいは、両つの学問に関連するこれら事 かしながら、結果は予期したほど手答えのあるものではなかった。たしかに佐々木は、人文地理 佐々木から受けた影

あるが、 ない。 結果は同じであった。 実は、 今回の講演に際して、 念のため、「人文地理学と民俗学の境」を再読してみたので

係 K 0 慎重で の問 は不可解なことである。だが、また、 業としては明白に地理学の側に置かれ、 **|題に無関心ではいられなかったに違いない。にも拘わらず、その点が曖昧なままになって** ありすぎたのではあるまいか。そう考えられなくもない当時の情況も、 いささか穿ちすぎかもしれないが、彼は、 学問的関心の点では民俗学に属した佐々木は、 私はまったく知らな 彼のその立場の故 両者 の関 い る

切れ 木彦一郎の立場は、 ずれ の悪さを一 にしても、 途に批判する気持ちにはなれない、 人文地理学と民俗学の両者に関心をもち、 その後の私自身の立場でもあり、 というのが私の心情である。 したがって、 そのため 『日本民俗学研究』 に悩んでいた にみら 当 時 'n る歯 佐 K

UN

わ

户

で

ts

だ THI 必 者は 要は、 ったので の点を理解していただくために、私の乏しい体験をお伝えする迂回を許していただきたい。 本 に咎めだてする意識、 来 もともと、どこにもなかっ ながら、 あ あい 関連して発達したのであり、 両 この際、 者 が別 々の学問であるとする概念、 あえていらならば、 それは、 たのである。 本来どこにも存在 それ 人文地理学と民俗学の二つに、 近代人文科学の歴史を一見すれ は科学的対象自身がもつ性 それ故、 しなかったのであるとい 共通 の領域 質 で作業することを何 あん からの ば明瞭であるように、 わなければ なにまでこだわる 当然の 成り ならぬ。 行き か自

悩まされ て後になれ 六十になんなんとして、私は始めて海外渡航の機会を与えられた。夢のような経験であり、そし たわ ばなるほど、なぜ若い時に来てみなかったかと悔まれたのであるが、 れわれ の世代にとって、 所詮は無理だったのが実情であるけれども、 不況と戦争と病気に この旅行のな かで、

立民族学博物館の 最 初の点につい 機関誌に掲載された。 て申し上げると、丁度この旅行中に私の欧文の論文「日本の民家」が、 幸運な偶然から、 在日フランス地理学者プズー 氏 の好意でそ フランス国

ことの序でに

述べておきたい。

二つのことがらを体験したことが印象に残っている。

その一つは、

今日の演題とは直接関係は薄

の運びとなり、 もら一人の友人の甚大な援助でどらやら原稿を完成し、 編集部に送っ たものであった。

ヤツ •

稿を送付すると、 長ジ ク ミロ 一氏 いから直 編集部見

けである。そのなかでとくに印象的だったのは、私が、 原 としたのに対して疑義をさし抓まれたことである。要約すれば、フォークロアという名称は、 ているが、 解として種 彼我の差、 々の注意と訂正方の依頼を受けた。 折り返し当時の博物館 わが国でも一部の学会誌が 々の来信があって、

民俗学と人文地理学の狭間に立って

が、その場合、 舞踊 「など、民俗芸能の領域をとくに指すもので、これを学問の全領域に用いる向もなくはない 多分に好奇的な興味によるディレッタンティズムに偏しているので、私の場合適当で つまり、機関誌編集者の持っている権限の強さというものをまず知らされたわ 民俗学をわが国の通念にしたがって folklore いまではこの方式を採用 民間

ないというのである。確かに、彼の地のレコード店などでみても、 古典やポピュラーなどの棚の他 151

は

民俗の研 きである。 먼, folklore ひとがフランスの民俗だけを研究するならば、 く偏 究は、 この った領域ではなく、 という棚が設けられてそこには民謡類が収容されている。 研究者が日本人であろうとフランス人であろうと japanese ethnography である 場合、 この用語は共時的に多民族を比較研究する民族学 有形無形の文化や社会事象までを取扱うなら それは french ethnography 日本の民俗学が、 ethnology ethnography なのであって、 と共存する。 を用い もしそのよ 日本 るべ \$ نے

を通念として民族誌と訳し、 他民族の文化の記述と考えていた私には一寸したシ 3 "

うので

立 1 学が実によく協働している現状を見聞することができた。もちろん、 る。 の大学と、ベオグラドの大学の二つでしかないが、そこで端なくも、 以後、私自身は欧文では folklore は限定された場合にしか用いないことにしている。 いずれもその名称として ethnography を用いているのをみて、やはりそうかと頷かれたことであった。 クであったが、その後、旅程をユーゴスラヴィアまで足を伸してみると、ユーゴの大学の民俗学科が 申 0 の組織をもつが、哲学部のなかでの教室はつねに隣りあっており、 これで感心させられたのは、 ・し上げたい第二の点はやはりユーゴスラヴィアの大学での経験である。私が訪れたのはザグレブ 図書室では一人の民俗学の学生に会った。彼の修士論文はユーゴ農村の伝統的 ユーゴの在来犂については、すでに全国の郡単位ごとに調査があり、 図書室も共通である。 人文地理学と民族誌と書く民俗 両者は教室としてはそれぞれ独 な犂の ベオグラ 研究であ

É n 彼 入することによ たも 0 然木を利 たが、 課 のである。 題 K スラヴ はその未 私の方では、 用 対 L i た在 て国 って浮び上ってくる。その下図を見せながら、 ィアのような社会主義国であっても、 7. 施行部分を実地 来 0 1 南 犂が残存していることが、 ゴ 日本の民俗学や人文地理学の現状とひきくらべて感無量であっ 部 ス ラヴ では 1 1 調査 7 ル 0 コ 系 在 で が分布 主来犂は 埋 8 れ 国 ばよ 尨大な枚数 0 北半では Ш 1, のだ。 間 部 の伝統文化をけっ K この 0 は 有 この学生はい 調 床犂 二 調 査 1 であ カ 查 ゴ 占 1 は り、 1 民俗学 有 をめ して無視してはい 0 これ 原 かにも楽しそうに語 くり、 始 Ó 的 は 1 な犂、 ニシ 1 分布 1 た。 ア ガ を地 换 チ IJ ない。 ブ 1 言すると、 で行 図 系 に記 であ て

どころか、 むしろそれを強く保持しようとしている。べ オグラドも旧 市街は破壊ややみくもの変形

 \pm

n

7

1

ゴ

は

制限されて、よく風致を残しているが、ザグレブの街もオーストリア統治時代のウィー ン的 ts

風致

よく保存され、壮大なカトリック教会の傍には、 クが美しく輝いていた。 固 有の 服装で町に集うことは、 西欧諸国とても例外ではないこと、 テレビでもよく紹介される通りである。 土俗的な信仰の聖地があって、 スイス の チ 2

民俗学と人文地理学の狭間に立っ

その が 市 H 斉に ウ の祭日 地域 ý -E-に参加 には、 1 1 中世、 グ、 するのであって、 日 曜 この の外出 市を構成していたギルドのメンバーが、各ギルドそれぞれが保つ中 にも背広にネクタイという日本の現況はいったい誰がそれを決めたの 確 かい 大学総長 も特定の服装で参加すると聞 季節の祭日には、人々はその いた。 捧げられた無数の 改まっ た 业 1 日 K 0 リヒ 村 は 服

カ

と聞いてみたいものである。

研 É さらに一民族 る。 るのである。 · 究者の次元では両者の「境界」は本来なかったのである。社会学でも、 も用意もない このような伝統尊重のヨ 人文 民 主たる任務 に 俗学 民族 方法論的には人文地理学と一線を画しつつ、 う要因だけで人間が 地 は多民 も人文地 理学の立 争 は絶えず自己主張に力を尽し、 の編集 社会の この伝統、 かくて地域性をめ である。 族 が 0 弱肉強食の政治的文化的闘 理学 場 メンバーとして、 なかでも、 地域であ 本題の関係からは一言触れておかねばならない。 か これ b 今でも、 らいっても、 \exists ーロッパ一般の傾向は何によって保たれているのか。 り、 説明しきれるとい を文化として体系的に把えようとするのが、 1 ス 口 ぐる研究は、 Æ 人文地理学とは自然と人間の学問であると決めてかかる人もあるが、 今日でこそ、 " 1 13 一時期ではあるが、 本来、 ルトラデ で誕生し それが 地域性の存在を前提として認め、 争が絶えることがなか 各民族がそれぞれに国家を形成して 両者の方法論的確立とは表面 1 た。 った人文地理学者は、 シ 伝統の保守につなが E しかも現実にはその 日 1 ンとしての個 P フランス人文地理学の第一人者ド・ラ・ブ y パ での地域 々の 2 その主流のな たの 答は明白で 2 地域 たし、 性とは民族性 主字 フランスの社会学 主として民俗学の は 文化の差 周 無関係に今日まで続き、 する 現にまだ これを分析 知 ある。 この問題を論ずる余 0 かい 話 1, 機 0 に他 には る 関誌 それ 0 から 日 なら i な 1 任務 人も 説明する から か で p つて ってい あ ツ であ n パ ば は

ラー

シ

の女婿・

F,

7

ンジョンを迎えたというエピソードもある。

説 から り出 ら保持 を与えら 製品として輸入されたところに、「境界」 してお あり、 したのである。 自分自 かい ていた。 近代化に関して後発のわが国では、学史的な経緯とは無関係のままに、 れた人文地理学とは状況が異っているし、 なければならぬ点を多々申し逃しているので、くれぐれも以上はごく大筋を述べていると 1身ョ また初期の人文地理学者のなかには、 1 この点について、 ・ロッパ 的学風を継承したという点で注目すべき存在もあったことなど、 民俗学は日本では長らく在野の学問であ の問 題が派生し、 また、 たとえば小田内通敏のように、 柳 田 われ 国男という不世出の われをして長 1) く悩ませ 両者が、 リー 11 きな る 柳田とも ダ I それぞれ既 り官学に 機縁を を当初 な お詳 関係 っく 座 かい

承知していただきたい

学が発達するとマル その後、 人文地理学では、商工業社会や都市社会の問題を好んで取り上げるようになり、経済地理 キシズムの影響も入ってきて、民俗学だけが近隣科学であるとはいえなくなった。

人文地理学の狭間に立

L 単 展とともに民俗学的見地との疎隔がほとんど決定的となってゆくが、本元のヨーロッパでは新し このことは、洋の東西を問わず共通の状況である。ただし、わが国では、このような人文地理学の発 ておきたい は発展として、 な文化社会に育つた学問と、多民族文化の角逐から生れた学問的伝統の差であったことを、 のである。 当初以来の学問的関心の伝統は依然として残った。この差は、要するに、 あまりに 指摘

そのようなことを念頭において、 同じ問題に悩みつつではあるが、 佐々木とはよく似ているが、本

155

俗学と人文地 要では 二つの学問 た演題として、本日のような形を選んだわけである。佐々木は境界にこだわった。 これ .維 谷 ts 0 間 理学の両つの人文科学があることは認める。 を縫 13 ように、 bi ど強 か。 って進んでゆく、 はいわば二つの山 烈な あ Vi りのままをい \$ まだに強烈な個性を備えた一文化地域を対象とする時、 のとは考えてい えば、 というのが私の行き方であるといえば判っていただけようか。 脈である。二つの山 沖 ts :縄研究に手を染めた当初、 カン 2 た。 『海南 しかし、 脈の裾は互に入り組 小記 私の場合には、その境界 ぐらい 私 は読 は んだ谷間 んでい 沖縄 このことは、 をよく知らず、 たのであるが、 をなしている。 私も、 it 問 とり 題 民 156

旅

人はそ

沖 0 は

ない。

は

違っ

わけ重

その ば、 採 L い 訪 本土 日 0 個 第一 性 本農村社会学の手法にしたがって、その 私に 0 から 着手 村落社会なら程度の差こそあれ、 とっ で私はいやというほど、 て沖 組 は 沖縄県であり、 彼我の差を教えら 日本 必らず見つかる の一 ために必要なデー 民俗地域のように考えられたのである。 れた。 司族 団 タを確 たとえば、 を確 めようとした。 めようとした。 私 は 当 時 具体的 沖 先輩 縄 K 心 にいえ 学んで か は

世帯はある b ままに苦慮しつづけることになった。今日の見解を端的にいえば、 ら同族 その隣 が家生 私の接 団として当時は一般に受けとめられていた社会的組織 はないのである。 郭は周辺がまったく定かでない。 した村落やその地方では同族団を突きとめられない。 門中 は本土のように家連合ではなく、 いったいそれは何であるのか。 から あることは知ってい 沖縄文化とは、 親族 極端 が にいい 形 えば、 造るなん 皆目見当が 本土民俗と、そ 沖縄 たか 5 カン 0 らである。 の 村 つかな 組 門 1

は

げた存在であると考える。 の深いところでは同根でありながら、その後の歴史的発展の沖縄的 人体論 に入らぬ ままに、 長い話が続くのは避けたいのであるが、 この独自な文化によって充された地域、 それが沖縄だとい U な独自性の故に、 ま少し論を進めることはやむを 独自の発展を遂

0) やはり必要なのである。 えない。 狭間 九六〇年が私にとって、 だあって、混迷のままに研究を続行せねばならぬ長い期間が私にはあった。 L カン Ļ それは、 私が沖縄をどのような立場からみたのかということを説明するために 沖縄との関わりの最初の年であるが、それ以前にも民俗学と人文地 ひとくちにいえば、

私は民俗学に対しても人文地理学に対しても何から何まで忠実であったわけではない。学界の主流

は いつも外れたところから私の思索は出発してきたように自分でも考えられる。

学は柳 な傾向の強いものであった。昭和十三年頃からは、当時の日本民族学会に設立された民族学研究所に 大和浜を廻ったこともあったので、沖縄文化との触れ合いも古いこととなる。しかしアチックの民俗 竜一(永井昌文教授の叔父)などで組織された十島村調査団に加わって、奄美大島の名瀬・諸鈍・宇検 としてであるが、そこで渋沢が撮影した沖縄の十六ミリを見たこと、 る約十年の間、私は渋沢敬三の主宰するアチックミューゼアムに席をおいていた。まったくの一末輩 まず、民俗学に触れた第一歩において、私は柳田民俗学の外にあった。学生時代から大戦前夜に至 :田民俗学の語彙主義とは異って、多分に気分的な対抗関係に止まるとはいえ、自然科学主義的 昭和九年には早川孝太郎・永井

民俗学と人文地理学の狭間に立っ

organic whole 年長の所員・喜多野清一からは日本農村社会学の方法を親しく教えられたのであった。農 村 は なったものである。 お り 所長だった古野清人 それ はアチッ として分析し、 私はここから村落社会は、その構造の全体像を集約的に把えてこそ理解され クの自然科学主義とも、 (昭和五十四年三月逝去)からイギリス社会人類学の方法を鼓吹され、 総合的に把えるという点で社会人類学と農村社会学の立場は共通して 柳田民俗学の語彙主義とも、 方法論的にまったくあ 他方、最 社会 たと い異

U

らに

価

するものであることを学んだのであるが、

そのような考え方は当時自然科学的偏

向

に陥

って

1.

た人文地

理学に

b

語彙主義的な民俗学にも欠けていたといってよい。

理学に 理 面 1, 一解で 昭 ば 和 きなな 日 おける一つの新しい観点で重要な論点であったし、 八 本的 年地 カン 景観 |理学科の学生となった私をまず魅了したのは景観地理学であった。 2 た。 地 この日本的景観地理学にあっては、 理学であって、 景観地理学の全容では必ずしもなかったことは大部後 種の自然科学主義が いまもそうだと考えるが、 方法的 景観 私が に強 0 概念は人文地 調 K 接 され、 なるまで したのは 义

学に所属

在野

人文地理学か

ら昭

和

九年以降急激にか

つ強力に開始された。

官学人文地理学は、

歴史とい

う要因を極力排除しようとする傾向

が強く打出され

たので

ある。

この点へ

0)

批

判

L

それ しない

いらの批

判 0

に対してはこれを無視

したのか、

理

解し得なか

ったか、

まったく反応を示すこ

とがなかったが、

若い学生には大きなインパクトを与えた。こうして個別分科の如何を問わず、人文

それが昭和十七年国立民族研究所に解消するまで研究員とし て在籍したが、この間、一方で 158

移り、

科学には歴史的過程 への顧慮がつねに不可欠であることが判ってきたのである。

ので が、 0 た」という一応の結果は出ても、 るのである。 -事象の来歴についても「昔は」という一言に終る。AからBへの変化をもたらした原因が何であっ 柳 あるが、 H 民俗学であるとしたが、 自 身が 後継 傑出 語彙主義に出発して、 者に対しては、 した歴史眼 の持ち主であったことは、 その編年方法はすこぶる曖昧で、「もともとはAで、 Aの時代とは絶対的に何時の時代なのかはほとんど言及がなく、ど 歴史学的関心を排除するように厳しく求めたと、 重出立証法を駆使し、その結果、 たとえば名著『日本農民史』によく窺 個々の民俗事象の それ 私などの 根 7) 5 元を探 B I K わ るの は n 映

た のかも、 充分にはつき止められぬまま、 民俗事象には記録が乏しいのであるから、たとえ、相対的なものに終る惧 ただその事実だけが示されるのであった。 れがあるにせ

よ

民俗学者、 今日の民俗学で用いられる用語もこの著作から始まるのであるが、柳田自身は後年、この論文を周圏 らず、『蝸牛考』を単行本として刊行するに当っては、分布図を取り除いてしまった。 「蝸牛考」において、言語地理学的な手法を多分に取り入れて、 美事な成果を挙げている。 にも拘わ 避けてゆくのである。かくて、 のための試みとみられることを嫌い、その濫用を戒めるに急であって、 編年の技法が編み出されねばならないはずである。事実、柳田は 小野重朗がこれを再評価するまで、 民俗学における地理学的方法は、 むしろ放置されて顧みられなかった。 戦後、 『人類学雑誌』に発表した労作 これを育成することをなぜ 沖縄にも縁の深い鹿児島の 周圏論という

論

カ

159

ついて、 いでなが 上記 ら触れてお 『日本民俗学研 け ば 究 = のな 1 ロッパ民俗学における地理学的方法、 かで岡正雄 は、 独墺民俗学に おける地理的民俗学を 換言すれば分布論的方法に 「大い に利

P 用すべき方法であるが……民俗学にとっ 柳 H の見解を代表したものといえるかもしれ て成立の条件をなすような方法ではない」と批評してい ない。

以 論 述が多岐に わたったが、 これを少し整理すると、要するに、 文化地 域の単元全域を見通すことが必要であ 私の考えでは、 地 域文化は、 と思

学のように偶然に頼りながら資料を集めてゆくのでは系統的な研究は到底期待しえない。し 能しあってい われ まず集約的 whole 社会人類学や農村社会学の見解からす に調査され るかを明らかにせねばならない。これが集約的方法 intensive method である。 と把え、 ねばならない その構成要素を分析するとともに各要素がいかに結びつきながら、 と同 時に、 れば、 たとえば一村落 (いわゆる自然村) を有機的 日本 か 相 る Ti. なが 下民俗 全体 K 機

にも十分な証 ル モ ース は 一明性をもちうると主張しているが、モースの言葉ながら、 工 スキ モーの社会形態学を述べるに当って、十分に用意された一 これには異議を括 個の事例研 究が科学的 しはさみた

一地点を集約的に把えただけではまだまだ不充分である。

フランス社会学の雄

ル

-6

ら、

地域文化は

い。とくに、 沖縄 の民俗社会の場合のように、伝統的な村落社会の孤立性・閉鎖性がきわめて強く、

極 無数のスモー まりない。どうしても、文化単元としての沖縄というものに一応も二応も光をあてて、その広域的 ル トラデ ノイシ E ンの世界が展開されている場合、 一をもって総てを押し計ることは危険

るの

約的調査と広域的調査を交互に関連させながら、研究を深めてゆかなければ沖縄文化の問題を解明す な全容を把える試みを反覆しておく必要がある。これが広域的方法 extensive method ることは出来ないというのが私の当面 の結論である。 であ って、集

的史料は充分に注意されなければならず、もし、その可能性のある史料が見出されたならば、それを n 果して証明となりうるかどうかは甚だ疑問である。よく見受ける行論であるが、 は示唆でありうるにしても、果して証明たりうるものであろうか。問題はその関連を現実に示してく の事象は大陸の、 の前しを見せている構造主義にしてからが、 る事実を発見することである。その意味からすれば、集約的と広域的調査であるとを問わず、 75 to 一言すれば、 あるいは南方の、どこそこの事象に等しい、だから……という式の所論は、あるい 民俗文化の研究には残念ながら法則性の研究が欠除している。最近 性急な文化構造のシェ ーマを演繹するに止 沖縄文化のこれこれ H まって 本でも流行 お

テープも参照してはおらず、ノートに基いて筆をとっているので、当日の行論そのままではないかも 充分な批判の上利用することを怠ってはならないと考えるものである。 うれず、附言も少なくないことをお断わりしておきたい。 一は去る十月一日、那覇において述べた講演の冒頭の論旨である。すでに時日が経過しており、

L

以上

講演ではこれに続いて、日本全土にわたる民家型式と、沖縄地域を対象とする親族称呼をとりあげ 歴史 161

てその例示を試みた。この二つのテーマは問題の本質が深く沖縄文化としての民家・親族称呼と係っ

見込みがあって、この二つを選んだわけではなく、従前の興味を沖縄に敷衍させたところが、このよ ており、 うな好運に恵まれたに過ぎないのではあるが、やはり何か因縁があったように思われてならない。 沖縄を導入することによって、日本文化がよく理解される絶好のテーマである。私は充分な

心のある読者はつぎの拙稿を何卒ご参照いただきたい。 ただし、両者とも、すでに専門誌に発表したものであるので、本紀要に再録することはしない。関

- 1 「民家型式の系譜 試論」日本民俗学会『日本民俗学会会報』昭和四三年(一九六八)。
- 昭和五三年(一九七八)。1を補訂再録したもの。 『民家型式の系譜 試論』至文堂『現代のエスプリ』増刊『日本人の原点』2(文化・社会・地域差)
- "Objets et Mondes" Musée de l'Homme, tom, X, fasc. III., Paris, 1970 'Maisons rurales au Japon. Types, répartition géographique et développements historiques'
- (1980 刊行予定) 'Geographical Distribution and Historic development of the Rural House Types in Japan. A Cultural Geography—' The Association of the Japanese Geographers: "Geography of Japan"
- 5 ─」日本民族学会『民族学研究』第三○巻第一号、昭和四○年(一九六五)。 「南西諸島における親族集団称呼の若干に関する年代論的知見 社会地理学的方法による一つの試みー